

対話：現代「日本」考古学

ジョン・アートル（以下、「アートル」）今回は英語圏で日本考古学を発信しているお二人をお呼びしました。なぜそれがこのセミナーに必要なのかというと、お二人を Audience が違う場にお呼びしたかった、ということです。お二人の語りや応答というものが、英語圏で話す場合とは、また違うものになるのではないかと考えたのが大きな理由です。私の印象では、日本における日本考古学と、英国や米国における日本考古学は別物だと思っています。英語で書かれた論文とはまた違ったお二人の側面を垣間みられることも期待して、今回お呼びしました。

私は大学院の時はカリフォルニア大学バークレー校で人類学を勉強して、同じデパートメントには羽生淳子先生もいたので、彼女から日本考古学の話も聞いていました。でも、その当時はあまり考古学に興味がなかった。興味を持ち出したのは能登半島で文化人類学のフィールドワークをしていた時です。鹿西町というところで主に調査をしていた時に、雨の宮古墳が整備されていく過程や「おにぎり化石」なるものが出土してそれが町おこしに利用されて行く過程を目の当たりにして、日本における考古学の多様なあり方に興味をもった。ただ、そういうものにも興味をもって調べて行けば行くほど、アメリカ、あるいは英語圏での日本考古学の「語られ方」というのが、日本考古学のある一面のみを取り出して、英語圏の文脈で理解されやすい話題、例えばナショナリズムとの関係などを中心に議論しすぎている、というも分かってきました。このセミナーの成果は将来的には英語での発信も考えていますが、これまでの英語圏の議論では取り上げないような話題も掘り上げたい、というも意識にあります。

「語られ方」をきっかけに話を始めたいのですが、お二人は発表言語の違い、つまり英語と日本語によって、内容や伝えたいことは変わりますか？

溝口 孝司（以下、「溝口」）私が英語圏で発信を続ける動機というのは大きく分けて2つあります。

考古学に限らず、学問というものはある種の「閉じ」がないと、つまりシステムとして体系化されていないと成立しない。だから「閉じ」ることは学問にとって必要ですが、かといって「閉じ」すぎるのも問題がある。日本考古学はその「閉じ」具合が高いと感じています。様々原因はありますが、欧米に比べると、日本は言説空間を閉じる傾向が強い。それを打開していくため、というのが動機の1つです。一方で、今でも西欧中心の植民地主義的考えというのは続いていて、欧米のやり方をそのまま日

本やアジア各国に導入させようとする傾向もその一種です。それに対して、日中韓などの東アジアの考古学をこの3ヶ国のどこか1つの言葉で行う、というのは原理的にはあり得ますが、歴史的経緯等から、その可能性は極めて低い。すると東アジアの中でもそれぞれの国で「閉じ」具合は高まる。では、母国語でもない、隣国の言葉でもない、第3の言語として、色々問題はあられるけれど、英語でやったらどうか、ということです。そうすることにより、日本考古学を専門として研究していない人が、比較対象として日本をとりいれることができるのではないか。それにより「違和感」という新しい風が日本考古学に吹くことを期待しています。

二つ目の理由は裏事情的なこともあります。たとえば、こういう発表、ある種の人々の神経を逆撫でしかねない内容の発表を日本語でやり続けると、おそらく私は日本考古学の枠組みで研究者として存続できない。こうした内容を日本語で発表できない、という自分のフラストレーションを英語で書くことで発散するという意味も、正直あります。

岡村 勝行（以下、「岡村」） 私は広く Heritage /Archaeology Management に関する内容を、欧米では英語で日本を紹介し、日本では欧米の事例を日本語で紹介する、ということをしてきました。気を付けていることとすれば、英語圏の Audience に対する場合は、英文スタイルで構成するように配慮している。つまり、結論を先に言うとか、そういうことです。

私は、今日は2016年に日本で開催される WAC Japan の事務局スタッフという肩書きでここに来ていますが、この WAC (World Archaeological Congress) というのは英語圏の研究者だけで構成されているわけではありません。そもそも現在、自国以外の国の「海外」考古学や、広くヨーロッパ考古学というのが英語という言語で成立し得るのは、英国・北欧・西欧・米国などの一部でしかない。そのように考えると、英語圏と日本で自分の意識するポイントが変わるように、WAC のような組織が成立し得る今日では、どこで発表するかに合わせて意識するポイントを変えていくことが必要になると考えています

アートル 母国語以外の言語では、考古学的研究の具体的な議論というのは案外にできない。それでメタ的に、「日本考古学」をみていくという話になるのは理解できます。自分の経験では、羽生淳子先生が「小さいデータで大きなことを言うのがアメリカ考古学では評価されるが、日本では多量のデータから小さいことを言うのが評価される」と話していました。これもメタ的な見方の一種です。

また、バークレー校の羽生先生の研究室の学生が、縄文時代の土偶を研究テーマにしようとしていましたが、そのアプローチがあまりにアメリカ考古学的だから、日本ではまともに評価してもらえないだろう、だから羽生先生がやめさせた、ということも聞きました。

岡村 羽生先生の別の言葉で、「日本考古学は動く考古学、アメリカ考古学は動かす考古学」というのがあります。確かに、北米考古学は一攫千金を狙う傾向があるように感じます。

溝口 そうは言っても、日本考古学は時々反証可能性のない、突拍子もない議論・言説が出る場合があります。確かに北米は小さな Material で大きな話をするかもしれませんが、「科学的< scientific >であること」を担保しなければ、という意識は強くあります。それもあって、例えば極端なナショナリズムに吸引されることも少ない。日本考古学はそのシステムの中では研究の過程は非常に慎重で堅実、実証主義的と言われているにも関わらず、いきなり突拍子もない言説が横行することも多々あります。そういうことを避けるためにも、先に言った「違和感」という風を吹かせる必要があります。そういう意味では、私は「羽生さん、もっと頑張ってください」と言いたいですね。

アートル 会場から何かありますか？安芸さんとか。

安芸 早穂子（以下、「安芸」） 溝口先生の話聞いて、私は広くメディアというところにいる、いわば自分自身が媒介<メディアム>となっていることへのある種の責任みたいなものを感じましたね。

アートル 吉田さん何かある？

吉田 泰幸（以下、「吉田」） ちょっと前にジョンさんが紹介した、羽生先生と学生さんのくだりは、日本とアメリカで「考古学である／ない」が全く違う基準である、ということだと思いました。その二項対立に関連して、溝口先生、岡村さんにお聞きしたいことがあります。

溝口先生の発表が終わった後に、私は「理論的なことを突き詰めると、こんなにもエモーショナルになる」という感想を述べましたが、その二つは無関係のものではなくて、裏表の関係だと思っています。つまり、エモーショナルであればあるほど理論的に先鋭になることもあり得る。溝口先生の話の中では、「考古学である／ない」をはじめとした、実は媒介されまくっていることに気づかない「無媒介の作法」による二項対立がいくつもあることと、そのメカニズム、問題点について詳細にお話していただきましたが、私はその裏にもある種のエモーショナルな、例えば「ルサンチマン」みたいなものを感じます。具体的に言えば、溝口先生は「君のやっていることは考古学ではない」ということをたくさん言われてきたのではないかなあ、と予想しています。その経験談をもうちょっと具体的にお話ししてほしいです。

岡村さんには、「考古学である／ない」の二項対立がパブリックアーケオロジーに

も及んでいるのではないか、つまり「パブリックアーケオロジ―は考古学じゃない」と言われたことはあるかどうか、これをお聞きしたいですね。

溝口 「そんなもの考古学ではない」というのは、研究者としての形成期に誰もが言われることだと思います。そして、必要なことだとも思います。というのは、未熟で、科学的な手法の範囲を逸脱する研究をしようとしたときに、咎められるのは当然で、正当だからです。しかし、「考古学ではない」と言うその根拠が不明確なことがあって、根拠を問うと、根拠を求めて問うこと自体がけしからん、とさらに咎められることが日本ではよくあります。これは発表でも申し上げたとおり、「無媒介」のつもりでも実は何かに「媒介」された上での発言なので、それに全く無自覚なのはよくないことだと思っています。だから私は、「君のやっていることはくだらないよ」と言われている人を見ると、応援したくなるんですよ。

岡村 「パブリックアーケオロジ―は考古学なのか」と問われたら、「考古学ではないが Archaeology ではある」と応えるようにしている。自分自身も考古学だと思っていない部分もありますが、一方で**考古学者**が行わなければならないことであるとも考えています。考古学が職業化されることによって文化遺産を扱う仕事のようになっていて、Heritage Manager であることも求められている。そこで、「考古学である／ない」にこだわって、その枠を狭めるのは自分たちの首を絞めるだけだと思います。英国では隣接諸科学を吸収させて Archaeology の意味合い・範囲をどんどん広げていきました。そうやって広げることによって、もっと大きなことをしようとする。だから、「考古学である／ない」というのにこだわるのは意味がないと思っています。

アートル パブリックアーケオロジ―を批判する人の言い分としては、「それは既にずっとやっている／やられている」という意見がある。しかし、その「やってきた」内容というのは、岡村さんが紹介してくださったパブリックアーケオロジ―の4つのアプローチのうち、教育・広報的アプローチという前者2つを意味していて、後者の2つ、多義・批判的アプローチはこれまでもあまり行われていないのではないかと。

岡村 加えて、パブリックアーケオロジ―というのは、考古学が大学で生き残る術で

* 下部にある註は吉田泰幸による

考古学者 岡村氏は各国の考古学的遺産管理 (AHM: Archaeological Heritage Management) に携わる人々の名称を紹介するなかで、日本語の “koukogakusha” は発音が似ているが “koukogaku-sha” (archaeologist) と “kouko-gakusha” (great scholar of archaeology)

の二種類の意味を持つとしている (Okamura 2011: 82)。紙幅の都合で掲載していない発表スライドには「諸関係のもととなる言葉の不在、弱さ、選択の迷い」と題されたものがあり、その中に「考古学者は誰か、どこにいる」という問いがある。

あるかもしれない。パブリックアーケオロジという言葉で理論を先鋭化して、先ほど言ったように考古学の意味合い・範囲も広げて、居場所を確保する。そういう戦略の一部として使われている側面もあると思います。

溝口 私は「既にやってきた」という発言は禁止すべきだと思います。もしそういうことを言うのであれば、自分たちのやってきたことと、今やろうとしていること、以前と今の考古学がおかれているコンテキストを比較して、その上で意味があるかないかについて発言すべきです。現状では、そういった発言は、これからの様々な可能性を阻害し、拒絶する言説にしかありません。それはかえって、考古学が目指しているところの説明・解釈における手順をもかえって退化させている、と言えるのです。プロセス考古学、ポスト・プロセス考古学を経てきた「現代」の考古学では、サイエンティフィック< scientific >な考古学とインタープリティブ< interpretive >、解釈学的な考古学は、両輪として進まなければなりません。

鏡味 治也（以下、「鏡味」） 溝口先生の議論は、文化人類学や社会学の分野で30年前くらいから言われてきたことに非常に似ています。つまり、もう手あかのついた言葉になってしまいましたが、「脱構築」というものですね。いわゆるポストモダンと言われる議論です。文化人類学では特にポストコロニアリズムの流れの中で、民族誌をはじめとして、自分たちの足場を見直してきた訳ですけど、考古学の場合は、どうやって考古学者もとらわれている前提・先入観を問い直して、その先に行くのか。つまり、モノを媒介して過去を語るときに、どうやって現在の前提や先入観を退けられるのでしょうか？

溝口 考古学の研究対象は、文化人類学とは違って言い返してこないモノです。人類学の調査でインフォーマントが言い返してくるということは、人類学者の問いかけがあってこそであり、問われて初めてインフォーマントにとっても当たり前だと思っていたモノ／物質文化が問題化される。そういった応答に近いイマジネーションを考古学でも確保できるかどうかを鍵だと考えています。問われる前までに習慣化されたも

プロセス考古学 1960・70年代に人類学的な考古学に影響を与えた理論的・方法論的アプローチ。ニュー・アーケオロジとも言われる。それまでの考古学的資料群を時期・地域ごとに配列することにとどまっていた文化史的考古学への批判として登場した。文化変化の「プロセス」を生態系との関係や経済的側面から明らかにしようとする機能主義的傾向、データと解釈を繋ぐミドルレンジオロジー（中範囲理論）に見る論理実証主義的傾向が強い。

ポスト・プロセス考古学 1980年代にイアン・ホダー（Ian Hodder）を旗手としたプロセス考古学に後発する考古学の集合体。プロセス考古学を支える近代西洋科学に特徴的な普遍性への志向や枠組みそのものへの対抗といったポストモダンの考古学として側面がある。社会構造と人々との関係を機能主義的に理解するよりも、相互作用的に捉える視点の導入と、その際に文化の「意味」により着目し、歴史的コンテキストや解釈学なども重視する傾向にある。

のがあって、習慣がモノに反映されるとしたら、対話しながらそのメカニズムをどう解明していくのか、ということです。人類が持ち得る幅の広さは現時点では確定できないものの、人類学・社会学は学問の性格上、その幅を確定していこうとしています。その取り組みを、考古学の論証過程に組み込んでいけるかが課題です。

鏡味 語らないモノ、コンテキストから切り離されてしまったモノからどのようにイメージを広げ、ふくらませるのでしょうか。

溝口 解釈の多様性を確保しつつも、「なんでもあり」の相対主義に陥らないように注意するしかありません。日本考古学では最初から解釈はしない、というアプローチをとるとされています。しかし、そうは言いながらも実際には解釈は行われていて、しかも相当にいい加減なものもあり、無反省な場合も多々あります。それは議論の手順が方法化されていないから、というのも原因です。人類学・社会学の成果を体系的に学び、取り入れて行くことが重要です。

鏡味 岡村さんのご発表は、日本考古学界とイギリス考古学界を比較したもののように見えました。ところで、今日のお話は誰に向けて話す心持ちだったのですか。私の印象では、今回は広くパブリックに向けて、というよりは、ほぼ考古学者・同業者に対して、と見受けられたのですが。

岡村 確かに同業者に向けて、今はどういう状況にあり、どういう課題があって、それらをどうしていったらいいか問いかけて行く、という意識はありました。同業者、あるいは考古学を学ぼうとしている人向けであり、一般向けではなかったかもしれない。パブリックアーケオロジーは、今考古学に関わっている人たちのための一つの運動論でもあります。

鏡味 その運動の現場というのは、博物館ですか、それとも発掘現場ですか？

岡村 博物館はパブリックとの接点としてイメージしやすいし、一番わかりやすい現場の例かもしれないが、それに限らない。考古学にまつわる日々の現場、体制を作るところが運動の現場と捉えている。

安芸 私はNPO 三内丸山縄文発信の会にも所属して、理事をしている。NPOの人は今日の岡村さんのこういう話をすごく求めていると思いますよ。日本には素晴らしい資源があちこちにあり、情熱を注いでいる人々がたくさんいる。考古学者・同業者だけに向けて話をしているつもりでも、それ以外の人たちにも届くと思います。

岡村 少し誤解を招いたかもしれません。ここでいう同業者というのは考古学に関心のある人、という程度の範囲と考えています。

溝口 岡村さんが『入門パブリックアーケオロジ』という本を書いたのは、先ほど私が言った、置かれた状況からどうしても「閉じ」がちな日本考古学を開くために、教科書的な役割として、方法論的なものが必要だと考えたからではないでしょうか。そうした方法論にふれた後に、実践に向かって行くのがいいかもしれない。そういった理論あるいは参照枠なしで実践をおこなっている人同士が出会うと、お互いのローカルナレッジに固執して、生産的な議論にならない可能性がある。

河村 好光（石川考古学研究会代表幹事。以下「河村」） 今回のセミナーの感想を少し述べさせていただきます。全国組織である日本考古学協会は 4000 人以上の会員がいます。日本考古学を行っている人はそのようにたくさんいて、考えていることはそれぞれ異なる。溝口さんは現状に強いストレスを感じていて、その原因が何か、をつきつめているように聞こえたが、実のところ私はあまりストレスを感じていない。

言語に関して言うと、私は日本考古学を行いつつも、最近のフィールドは中国や東北アジア、朝鮮半島も含まれている。それらの地域では英語が通じるのはごくわずかなので、その地域の言語を学ばなければならない。

確かに、特に戦後の考古学は、日本人による日本語での考古学だった、と言えるかもしれない。その限界みたいなものに溝口さんは言及していたが、石川県の石川考古学研究会は 1948 年に発足し、会員は今では 300 人を超え、石川県内の考古学イベントであれば、主催団体に関係なく、今日のこのイベントでもホームページ上で紹介し、会員・非会員に関わらず会誌に投稿が可能、という環境を作り上げてきた。このような活動をずっと実践してきたが、確かにアートルさんが言われたように、岡村さんが紹介してくださった多義的・批判的アプローチというのは弱いかもしれない。発掘調査の現地説明会には 100 人くらい集まるが、質問がない、議論にならない現状がある。その辺りのアプローチをどう考えていくかは課題だと思う。

溝口 言語の問題についてお答えしたいと思います。ある地域の考古学を研究しようとした時に、ベーシックな知識を得ようとしたら、その地域の言語を学ぶしかない。その必要性を軽んじている訳ではありません。そのベースの上に、ヨーロッパでは、ヨーロッパ全体をフィールドとして、国境がなかった時代の研究・議論を英語という共通言語で行うことがある。東アジアでそれと同様なことが現在不可能である理由は、歴史的経緯に加え、言語の問題が大きい。決して英語でなければいけない、と言っている訳ではないのですが、現状では英語が最も可能性が高いのではないかと、ということです。

河村 そうは言っても、日本語を英語に訳す際の難しさがある。例えば、日本語の考古学用語をどう英語で表現するか、という用語集などを作ってくれたら、と思います。そうしたら日本考古学の国際化が進むのではないか。溝口さんしかできないような仕事をやっていただきたい。

岡村 溝口さんは **Japanese Journal of Archaeology** を刊行し始めています。発信という仕事はすでに行っています。

河村 それでも日本の考古学者は英語での発信という点において、国際的に遅れていると思います。溝口さんには世界と日本考古学者をつなぐ役割を担ってくれたら、と期待しています。

溝口 それはいささか過度な期待かと思いますが、一点付け加えさせていただくと、JJA (Japanese Journal of Archaeology) の刊行は政府からの外圧でもあるのです。日本考古学協会の学会誌である『日本考古学』はこれまで補助金を得て刊行してきましたが、最近政府の方針が変わって、オープンアクセスの国際誌を刊行しなければ、補助金を切られる、という状況になり、それで JJA を刊行することになった。

今は英語で発信している人、しようとしている人は増えています。また、中国・韓国の若い人たちは英語が上手い。英語で発信というのは、外圧の結果でもあり、内発的でもあります。

村野 正景 (京都文化博物館学芸員) 英語で書くと言うことが、本質的な問題解決につながるのでしょうか？すでにラテンアメリカの考古学研究誌では、スペイン語での投稿も認めるものもあります。むしろ、ラテンアメリカのことを書きたいなら、ラテンアメリカで通じる言語で書きなさいと、よく言われます。したがって、英語で書くように促すのではなく、例えば東アジアでは日・中・韓の三ヶ国語の利用を認めつつ、どのような工夫をすれば相互理解を深められるかという雑誌運営側の工夫が求められているのではないのでしょうか(例えば、要旨を雑誌運営側が三ヶ国語に翻訳する)。もちろん、英語圏に認められたいのか、他の言語圏、国や地域に認められたいのか、その目的によって工夫は異なると思います。本当に英語が正解なのかという点が疑問として残ります。現在の学術界、国際社会におけるパワーバランスの不均衡を打破する策は、むしろ英語を用いることではないとも考えます。

もうひとつ、多義的アプローチが過剰な相対主義、「なんでもあり」にならないようにするための方法論は重要だと思います。しかし、その評価・判断基準を溝口先生

Japanese Journal of Archaeology 日本考古学協会が刊行しているオープンアクセスの英文雑

誌。溝口氏は Chief Editor を務めている。
URL: <http://www.jjarchaeology.jp>

のご発表にあったような「反証可能性」に求めても、それはどこまで有効なのか、という疑問があります。「教科書的な知識」が有効な領域の問いには、「反証可能性」は十分に意味があります。しかし、「トランスサイエンス」ないし「ポストノーマルサイエンス」のような科学で問うことができても科学だけでは正答が見つからない領域の問いには、「反証可能性」はあまり有効でないと思います。必要なのは、「合意形成」ではないでしょうか。例えば、博物館の展示解説のボランティアが自分の印象や解釈に基づいて勝手な解説を来館者に行ってしまったとしても、「これは私の考えですが、・・・」という枕詞をつけて話してもらうように、当館ではお願いしています。それによって、聞く側にとっては話す側の解釈を受け入れるかどうか、選択することができ、話す側と聞く側に対話が生まれます。これが、正答が見つかっていない領域での「多義的」であることを認めるアプローチになるとと思います。例えば、この当館のようなスタンスについて、どのようにお考えになりますか。

溝口 そのケースでは、ボランティアさんとの議論が大切ではないか。その際は、お互いに変わらなければならない。ボランティアとは無給で手伝っているのだから言いたいことを言っても許される、博物館側はそういった方たちにあまり意見が言えない、ということではなく、ボランティアはその説明内容にも責任を果たすという意味合いも確実にある。そういったことも含めた話し合いが必要かと思えます。

言語の問題については、そもそも共通の土俵がないというのが問題であって、その問題へのひとつの解決策として英語でやりませんか、という提案を出しました。この提案に対する反発として、結果的に日・中・韓の三ヶ国語で、ということになっても、私は良いと思っています。

アートル お二人はパブリックアーケオロジーの4つのアプローチで言うところの「批判的アプローチ」から日本考古学を見ているように感じる。それは一旦外（国外）に出たからできることです。つまり、英語圏の中のセオリーをとおして日本を語るという試みです。現在、日本の考古学を英語で語る場合、批判的と言っても Archaeology と Nationalism の関係など、ある種の英語圏によくある批判の「型」に落とし込んで語られるという傾向があります。そういった「型」は他にもあって、社会学の理論の適用の仕方など、お二人の発表はそうした「型」に収斂している面も一部あるけれど、お二人の外から日本の考古学を見る、というアプローチは、日本考古学を変えたいという意識があるのではないか。

WAC(世界考古学会議)による複数形の Archaeologies という理念に見られるように、

「トランスサイエンス」ないし「ポストノーマルサイエンス」 科学者コミュニティ以外の人々との間での合意形成を目指す実践を支える概念。こ

の考えに基づく村野氏の実践例は村野 2015 参照。

考古学とは何か、を定義するのではなく、考古学とはいくつか、を問うことも必要ではないか。いくつかの意味を持ち、それぞれがどのように人を動かすのか。日本の考古学はいろんな物語をつくるのが可能だと思う。私も外から日本考古学を見ている訳ですが、日本考古学はやや硬いかなあ、という印象を持っています。

岡村 サイモン・ケイナー（セインズベリー日本芸術研究所・考古学文化遺産センター長）さんは、日本は Implicit Archaeology、英国は Explicit Archaeology と表現しています。

溝口 変化しようと思うのは、強烈な違和感に出会ったとき。生まれ育った場所にながら他者性をどう感じるのか。そうしたことが可能な環境をどう作るのか。その点で日本／日本考古学はまだ課題が多いように思う。

吉田 お二人から感じるのは、考古学をより面白くしたいという気持ち。今日は難解だった、という声があったとしても、そこだけは伝わったのではないか。考古学をより面白くするために、違和感に触発されて何かが変わるかもしれない環境を作るために、それぞれの場でやれることをやるしかないと思う。